

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03130

研究課題名（和文）19世紀の中国イスラーム変相とイブン・アラビー

研究課題名（英文）Changes of Islam in China during the nineteenth century and Ibn `Arabi

研究代表者

中西 竜也（Nakanishi, Tatsuya）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：40636784

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀の中国ムスリム（漢語を話すムスリム）が西南アジアのイスラーム改革思潮に反応しつつイブン・アラビー（1240年没）思想を如何に受容・展開したかを解明した。中国ムスリム学者、馬徳新（1874年没）が、イスラームの中国適応の文脈で、西アジアのイスラーム改革潮流の影響下にイブン・アラビーの来世論を導入し、西アジアの聖者崇拜批判言説をイブン・アラビー思想によって先鋭化したことを論じた。また、その聖者崇拜批判が、後代の中国ムスリムに与えた影響を論じた。加えて、中国のイスラーム神秘主義者、ユースフ（1866年没）が、イブン・アラビー思想と南アジアのイスラーム改革思想とを如何に調停したかを吟味した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国ムスリムによるイスラームと中国社会・文化との調停をめぐる、従来と異なる新たな二つの結論を導き出した。ひとつは、その調停が、ときに外来イスラーム新思想の積極利用によってなされたということ。もうひとつは、その努力が、中国のムスリム・非ムスリムの融和に貢献したという点で、ときにムスリム内部の分断を促進したということ。これらの結論は、外来思想の排除やマイノリティの同化こそが社会の安定をもたらすという考え方を相対化する意義を有する。

研究成果の概要（英文）：I elucidated how Hui (Chinese-speaking Muslims) received and developed ideas of Ibn `Arabi (died in 1240) in response to Islamic reformist trends in West and South Asia. I argued the following points: In the context of adapting Islam to Chinese milieu, a Hui scholar Ma Dexin (died in 1874) introduced Ibn `Arabi's theory regarding the afterlife under the influence of Islamic reformist trends in West Asia, and radicalized critical discourses regarding the veneration of saints from West Asia based on Ibn `Arabi's thought. In addition, I discussed how later Hui added developments and gave responses to Ma Dexin's criticism of the veneration of saints. Furthermore, I investigated how a Chinese Sufi Yusuf (died in 1866) reconciled Ibn `Arabi's ideas with an Islamic reformist thought from South Asia.

研究分野：中国ムスリム研究

キーワード：中国ムスリム イブン・アラビー イブン・タイミーヤ 来世論 スーフィズム 聖者崇敬 イスラーム改革

## 1. 研究開始当初の背景

中国イスラーム思想史上、19世紀は一大転換期であったと予測される。というのも、当時の中国ムスリムは、前代よりもイスラーム世界との連絡が密となり、西・南アジア由来のイスラーム新思想と接触するようになったからである。たとえば雲南では、中国四大ムスリム学者の一人として著名な馬徳新(1874年没)が、メッカ巡礼・中東(エジプトやトルコなど)周遊(1841-49)を通じて様々な新思想を中国に招来したと目される。またその少し前、甘肅では馬葆真(1826年没)が、南アジア発祥のスーフィズム(イスラーム神秘主義)の流派のひとつ、ムジャッディディーヤ派の「イスラーム改革思想」を、新疆から持ち帰ったという。しかし、それら新思想の影響下に推進されたと思しき、19世紀中国イスラームの「変革」の具体相は、いまだほとんど不明である。

## 2. 研究の目的

19世紀の中国ムスリムが、イスラームを中国に適応させることを目指した、前代からの知的奮闘を継続する中で、西南アジアのイスラーム改革潮流に応答しつつ、イブン・アラビー(1240年没)の思想を如何に受容・展開したかを解明する。それを通じて、雲南(中国西南部)と甘肅(中国西北部)とで、異なる背景・様相のもとに推進された、中国イスラーム「変革」の具体相を究明する。加えて、17世紀ごろから西・南アジアで、イブン・アラビー思想の是非を一つの争点として激化した「イスラーム改革」の奔流の上に、19世紀の中国イスラーム思想の転折を位置づける。

## 3. 研究の方法

西・南アジアの「イスラーム改革主義者」の間で様々に論じられた、イブン・アラビーの思想(来世論やそれに付随する運命論・自由意志論など)が、馬徳新にどう受容されたかを検証する。それにより、西・南アジアの「イスラーム改革」の中国波及を考察する手掛かりを得る。

また、ムジャッディディーヤ派の「イスラーム改革」思想が、同派に連なる馬葆真の創始したスーフィー教団(イスラーム神秘主義教団)北荘門宦によって、いかに展開されたかを分析する。とくに北荘門宦が祖師スィルヒンディーの「目撃一性論」をいかに吸収し、結果、従前中国ムスリムのあいだで支配的だったイブン・アラビーの「存在一性論」に対し、どのような新解釈をもたらしたかを考察する。それにより、中国のムジャッディディーヤ派による「イスラーム改革」の実態を明るみに出す。

ムジャッディディーヤ派は、開祖没後、アジア各地に勢力を拡大し、オスマン朝下では支派ハーリディーヤ派の成員がタンズィマート改革(1839-76)に影響力を行使するなど、近代イスラーム世界の重要なアクターとして注視を浴びてきた。中国西北部でも北荘門宦を皮切りに、いくらかの支派教団が設立され、それらは現在も当地に巨大な影響力を保持している。本研究は、そのようなムジャッディディーヤ派の世界発展の一端を追跡する試みでもある。

## 4. 研究成果

### (1) 馬徳新の来世論

馬徳新がイブン・アラビーのアラビア語著作『叡智の台座(*Fusus al-hikam*)』に基づいて著したアラビア語著作『帰処の諸神秘(*Asrar al-ma'ad*)』と、その著作を下敷きにして、馬徳新の監修のもとにその弟子が漢語で著した『大化総帰』とを比較し、三著作の差異を検討した。それにより、中国におけるイブン・アラビー思想、とくにその「存在一性論(*wahda al-wujud*)」ないしそれに基づく来世論の「中国化」の実相を明らかにした。この研究は、本プロジェクト開始以前、2016年度中にある程度進め、途中の成果を日本語論文「馬徳新とイブン・アラビーの来世論」(『西南アジア研究』)にまとめて2017年3月に発表していた。そこでは、馬徳新が、イブン・アラビーのアラビア語著作を直接参照することによって、別人たちのペルシア語著作を通じて間接的にしか彼の存在一性論を知らなかった中国ムスリムの間に、同論にもとづく彼の独特の来世論を新たに導入したこと、その際、当該来世論を、本来矛盾するイブン・タイミーヤ(1328年没)の来世論や、アシュアリー神学の「獲得(*kasb*)論」と組み合わせることによって、中国伝統思想と調和させようとしたことを論じた。本プロジェクトでは、この議論に洗練を加え、それを国際学会で英語で報告したほか、英語論文にまとめて発表した。

当該論文では、イブン・アラビーのアラビア語著作『メッカ啓示(*Futuhat al-Makkiyya*)』中に、「火獄での浄化(*tathir*)」に関する記述を新たに発見し、『大化総帰』の記述と比較した。そして、このテーマに関しては、馬徳新がイブン・アラビーよりもイブン・タイミーヤ(1328年没)の来世論から影響を受けていた可能性があるということについて論証を強化した。なお、馬徳新がイブン・タイミーヤ説を受容していたとすると、それは彼が、同時代の西アジアに萌芽し、後にサラフィー主義へと発展することになるイスラーム改革思潮から、何らかの靈感を得ていた可能性があることを意味する。

また、同論文では、イブン・アラビーの主張する「火獄での幸福」をめぐる、中国ムスリム

学者、張中（17世紀半ば）の漢語著作『歸真總義』の中に類似の記述を新たに発見したことから、これを、同じ主題に関する馬徳新の議論と比較し、両者の差異を検証した。換言すれば、馬徳新がイブン・アラビーの著作を直接参照するようになったことで中国ムスリムの思想シーンにもたらした変化、中国イスラームの思想史的展開を、より明確に示したのである。

加えてその後、この英語論文の内容を、EHES（フランス国立社会科学高等研究院）で講演した。その際、Vincent Goossaert 教授から、馬徳新の来世論の背景には、当時の雲南の漢人社会に未来への不安感が蔓延していたことが関わるのではないかと、とご教示を頂いた。この点については、今後の課題としたい。

また、やはり当該英語論文執筆後、馬徳新によるイブン・アラビーの来世論と、アシュアリー神学の獲得論との統合が、17世紀以来の西アジアのある思想潮流に淵源することを、一次文献からより具体的に把握することができた（詳細は発表準備中）。

## (2) 馬徳新の聖者崇拜批判

『理学折衷』という漢語タイトルをもつ、馬徳新のアラビア語著作を通読し、同書に説かれる、イブン・アラビーの存在一性論や、聖者崇拜批判の思想を分析し、同時代の西アジアのイスラーム思想潮流にたいして位置づけ、この議論を日本語論文にまとめた。同論文では、馬徳新が、メッカ巡礼・西アジア周遊（1841-49）の際に受容した、聖者崇拜批判の言説を、存在一性論によって根拠づけつつ先鋭化していたことを明らかにした。また、馬徳新が、西アジア由来の聖者崇拜批判言説を存在一性論によって先鋭化する際、西アジアから将来した新しい経典ではなく、中国ムスリムの伝統的経典——中国ムスリム学者、劉智（1724年以降没）の漢語著作『天方性理』やジャーミー（1492年没）のペルシア語著作『閃光の照射（*Ashī`a al-Lama`at*）』を典拠としていたことを指摘した。さらに、馬徳新がそのように西アジア由来の聖者崇拜批判の言説を創造的に展開したのは、雲南ムスリムの反乱（1856-74）で、彼と異なって清朝への徹底抗戦の道を選んだ、スーフィー教団ジャフリーヤを弱体化させ、反乱終息とムスリム・非ムスリムの和解を進めようとする意図からであったと論じた。その意図を検証するために、アラビア語聖者伝の分析から、同教団が馬徳新と同じく存在一性論や中国ムスリムの伝統的経典を利用しながら彼とは逆に聖者崇拜を擁護していたことを明らかにした。そして以上から、イスラームの中国適応が、ときに中国伝統思想との調和以外の方法によってもなされることがあり、さらに中国ムスリムの内部抗争を通じて進められることもあった、と論じた。以上の内容は、日本語で口頭報告したほか、EHESでの講演や、他の国際会議でも英語による発表を行った。なお、後者の国際会議に提出した英語のフルペーパーは、論集の一部として出版される予定である。

また、馬徳新の聖者崇拜批判を相対化するために、民国時代の王静斎（1949年没）による同様の批判についても検討した。

## (3) 馬徳新の聖者崇拜批判のその後

馬徳新の聖者崇拜批判が、後代の中国ムスリムの間に如何なる展開や反応を生じたかについて検討した。そしてその知見を、日本語で口頭報告したほか、日本語と英語の論文にまとめた。当該論文では、馬徳新の論を継いだ、弟子の馬聯元（1903年没）とジャフリーヤ教団関係者との対立の様相を確認したほか、もう一人の弟子、馬安礼（1899年没）が、師の聖者崇敬論を、儒教との親和性の観点から根拠づけたことを論じた。また、ジャフリーヤ教団関係者らが、馬徳新一派に反発と歩み寄りの態度を示し、いずれの場合にも儒教や愛国主義といった非ムスリム漢人のイデオロギーを利用したと論じた。総じて、中国ムスリムによるイスラームの中国的適応の努力は、非ムスリムとの融和を促進した一方で、しばしば中国ムスリム内部の分断を助長することがあったことを明らかにした。

## (4) 前近代中国ムスリムによるイブン・アラビー思想の翻訳

中国ムスリムの思想史、とくにイブン・アラビー思想の展開における19世紀の位置づけを探るために、17-18世紀の代表的な中国ムスリム学者、王岱輿（17世紀半ば）と劉智（1724年以降没）が、それぞれの時代背景に合わせて存在一性論をいかに漢語で表現していたかを考察し、その成果を日本語で口頭報告したほか、日本語の論文にまとめた。同論文では、王岱輿と劉智が、それぞれ明末の社会の多極化に同調した陽明学の隆盛と、清初の中央集権化の試みによる朱子学の復権という異なる背景に適合的に、存在一性論の同じ議論に異なる漢語表現を与えていたことを論証した。この成果は、馬徳新についての先述の議論とあわせて、中国ムスリムたちがそれぞれの時代背景に応じて存在一性論を様々に表現していたその通時的な動態を解明することに寄与した。

なお、この内容をもとに英語の論文原稿も執筆し、某所に提出したが、先方の事情により出版までにはまだ時間を要する。

## (5) 北荘門宦におけるイブン・アラビー思想の改革

まず、中国で現地調査を行い、馬葆真の息子ユースフ（1866年没）がペルシア語で著した『心の歓喜（*Nuzha al-qulub*）』の写本をデジタル・カメラで撮影することに成功した。

その後、『心の歓喜』を読み進め、次の成果を得た。すなわち、ユースフが、イブン・アラビーの存在一性論と、それを批判した南アジアのイスラーム改革者、アフマド・スィルヒンディー

(1624年没)の目撃一性論との調停を行っていた痕跡を掴んだ。このような調停は、アフマド・スィルヒンディーのムジャッディディーヤ派の道統に連なるデリーのジャーネ・ジャーナーン(1781年没)やバダフシャーのギヤースィー(1768年没)によっても行われたことが知られる。今後は、スィルヒンディーはもとより、ジャーネ・ジャーナーンやギヤースィーの教説が『心の歓喜』にどんな影響を与えたかを分析し、北荘門宦におけるイブン・アラビー思想の展開の様相をより具体的に明らかにすることを目指す。この研究は、次の基盤研究(C)のプロジェクト「19-21世紀中国ムスリムの聖者崇敬論の中国的洗練をめぐるイスラーム世界史的把握」においてなされるだろう。

#### **(6) 中国ムスリムの重層的アイデンティティの動態**

中国ムスリムは自他の境界を状況に応じて様々に引き直すことで、中国社会において存続してきた。先述した、馬徳新やその弟子たちによる聖者崇拜批判、およびそれによる中国ムスリム内部の分断促進も、その生存戦略に関する事例のひとつに数えられる。馬徳新や北荘門宦がイスラームを中国に適応させる努力の中で推進したイスラーム改革を、中国ムスリムの臨機応変な自他識別による生き残りという大きな文脈の上に位置づけて理解するために、中国ムスリムの重層的アイデンティティの動態、とくに彼らのウンマ(全世界のムスリムが帰属すると観念される理念的共同体)への帰属意識についても考察を重ねた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nakanishi, Tatsuya	4. 巻 14
2. 論文標題 After Criticism of Ma Dexin against Veneration of Saints: Rethinking Chinese Elaboration of Islam	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究	6. 最初と最後の頁 138-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/262498	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西竜也	4. 巻 94冊
2. 論文標題 19世紀雲南の中国ムスリム学者、馬徳新の聖者崇拜批判	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方学報 - 京都	6. 最初と最後の頁 398-376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250685	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西竜也	4. 巻 826
2. 論文標題 明末清初の激動と中国ムスリム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西竜也	4. 巻 1134
2. 論文標題 異文化間の対話と共生を考える 中国ムスリム研究の近年の動向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 116-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 10件）

1. 発表者名 Nakanishi Tatsuya
2. 発表標題 Ma Dexin's Criticism of Saint Veneration: "Chinese"-Flavored Islam Formed by a Denominational Conflict
3. 学会等名 Inscribing Knowledge and Power in Islamic Societies: A Diachronic Study: A Joint Exeter-Tokyo Seminar (on Zoom) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西竜也
2. 発表標題 「中国的」イスラームの形成と「異端」
3. 学会等名 第22回洛北史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakanishi Tatsuya
2. 発表標題 How did Chinese Muslims harmonize Ibn 'Arabi's Ideas with Chinese Traditional Thoughts?
3. 学会等名 Histoire du taoisme et des religions chinoises (at EHESS, Paris) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakanishi Tatsuya
2. 発表標題 Chinese Muslims' Islamic Legal Reform during the Modern Period
3. 学会等名 Islam savant et islam populaire: contradictions et interactions. Une approche transdisciplinaire (at EHESS, Paris) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakanishi Tatsuya
2. 発表標題 Chinese Muslims and the Umm
3. 学会等名 L'Asie centrale dans tous ses Etats : questions et methodes (at EHESS, Paris) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakanishi Tatsuya
2. 発表標題 Chinese Muslims' Discourses about the Sufi Saint
3. 学会等名 Le culte des saints en Chine (islam et taoisme) : approches historique et anthropologique (at EHESS, Paris) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakanishi Tatsuya
2. 発表標題 A Chinese Muslim Scholar's Criticism against Saint Veneration
3. 学会等名 All-Japan-Exeter Joint Workshop / Tobunken Symposium Knowledge as Power: Production, Control, and Manipulation of Knowledge in Muslim Societies (at The University of Tokyo)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西竜也
2. 発表標題 『中国的』を再考する 中国ムスリム研究からの眺望
3. 学会等名 第83回ユーラシア文化研究センター(羽田記念館)定例講演(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tatsuya Nakanishi
2. 発表標題 Family, Umma, and Nation: The Multi-layered and Dynamic Identities of Chinese Hui Muslims
3. 学会等名 Redrawing and Straddling Borders: Chinese Muslims in Transnational Fields and Multilingual Literatures (at Institute for Research in Humanities, Kyoto University) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tatsuya Nakanishi
2. 発表標題 Using the Classics for Reform in Early Twentieth-Century Chinese Islam
3. 学会等名 AAS in Asia Conference, 2018 New Delhi - Asia in Motion: Geographies and Genealogies- (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中西竜也
2. 発表標題 明末清初の思潮変遷にたいする中国ムスリムの反応 王岱輿と劉智による人間の多様性をめぐる議論の比較から
3. 学会等名 第63回国際東方学会議 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakanishi, Tatsuya
2. 発表標題 Shifting between Islamic and Chinese Affiliations: Ma Liangjun 's Two Narratives about the History of Caliphs
3. 学会等名 AAS (Association for Asian Studies) Annual Conference 2018 (at Washington, USA) (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 中西竜也
2. 発表標題 中国でムスリムとして生きる ムスリム・マイノリティによるイスラーム法解釈の歴史的一様相
3. 学会等名 東北大学イスラーム圏研究会主催「イスラーム学際研究の試み 中央アジア・中国地域の視点から」(於東北大学川内北キャンパス・マルチメディア棟6F大ホール)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakanishi, Tatsuya
2. 発表標題 Chinese Expressions of the Umma, or the Global Muslim Community
3. 学会等名 THE SECOND SIKKIM UNIVERSITY - KYOTO UNIVERSITY JOINT WORKSHOP ON HUMAN SUSTAINABILITY (at Kyoto University)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nakanishi, Tatsuya
2. 発表標題 Ma Dexin and Ibn `Arabi 's Theories Regarding the Afterlife: A Chinese Expression of Sufism during the 19th Century
3. 学会等名 The First International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University "Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies" (at Kyoto University)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 東長靖、イディリス・ダニシマズ、藤井千晶(編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センター	5. 総ページ数 165
3. 書名 イスラームの多文化共生の知恵 周縁イスラーム世界のスーフィズムに着目して (pp.29-48を分担執筆)	

1. 著者名 Tonaga Yasushi and Fuji Chiaki (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University	5. 総ページ数 363
3. 書名 Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies (pp.151-170を分担執筆)	

1. 著者名 R. Michael Feener and Joshua Gedacht (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 272
3. 書名 Challenging Cosmopolitanism: Coercion, Mobility and Displacement in Islamic Asia (pp.121-144を分担執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------